

# 市民による防犯まちづくりとアート 高校生が考える「福音公園」



仙波 英徳

## はじめに

愛媛県松山市の久米地区は松山市の東南に位置し、人口 29,553 人、市内第 3 位の地区人口地域である。その地域の久米公民館による、まちづくりとアートの関わりを紹介する。

公民館とアートの最初の出会いは平成 17 年から始めた「地域安全マップ」の平成 20 年ターゲットを絞ったマップにしたいと筑波大学芸術系の学生と相談する。そして出来上がったのが、新一年生の地域に対する夢が広がるイラストマップであった(図 1)。手に取るとまちが好きになる作品が出来た。その時見つかった地域課題が「福音公園」である。



図 1 新入生に配布した平成 20 年度版のイラストマップ

### 福音公園の概要

平成元年 3 月 31 日「川附公園」として開設される。平成 18 年より国道改修工事の為工事期間中は閉鎖、平成 19 年に国道高架下の公園として整備工事が始まる。平成 20 年に高架下の公園として「福音公園」と名称を変え開設される。面積 2,518m<sup>2</sup> (テニスコート 4.5 面程度)

所有者は国土交通省、占有許可が松山市公園緑地課、管理組合は素鷲公民館区の枝松町内会、利用者は福音小学校児童という利害関係者が複雑に入り組んでいる。

## 事業経緯

久米公民館が主催している地域安全マップづくりでは、地域の「素敵なところ」と「不安なところ」を子どもと地域住民が一緒になって探す。その成果を、各小学校区一枚の地図にまとめて配布している。このマップ制作の「まちあるきワークショップ」で国道高架下の福音公園が、人通りも少なく薄暗く閉鎖的で不安を感じる公園として強く指摘されたため、21 年 3 月、学校支援地域本部報告会で地区の最重点課題に選定された。

まず、外部の研究者の協力を得て、「身近な公園調査」として公園に関する意識調査を実施する。次に、改善のためのワークショップを経て、「大人の目によって守られた全天候型の楽しい公園」という改善方針が決まる。さらに、当 NPO と協働活動に取り組んでいる高校生「愛媛県ヤングボランティアセンター」の協力を得て、公園改善のための「柱で遊ぼう!!公園☆アート」のアイデアが提案され、実施の運びとなる。

平成 23 年 3 月に、高校生が福音小学校の児童手形 600 枚を素材にしたアートパネルを制作する。橋脚に 3m×4m のメインパネル・3m×2m の東日本大震災支援パネル・1m×2m の制作過程パネルの 3 枚が設置された。(図 2)

24 年 3 月アート第 2 弾として、アートパネルの交換(図 3)と、22 年に高校生が提案していたスポーツエリアの開設に併せたオープニングイベントが開催され、200 名を越える参加があった。

## 事業推進の特徴

### 福音公園を考える会の設立

公園は、課題発見者の久米公民館区ではなく、隣接地域公民館区にある。そのため、当館の直接的な事業に出来なかった。そこで、両公民館をまたぐ地域が校区であり、公園が校区にある福音小学校長に依頼し、「福音公



園を考える会」を設立した。校長から関係団体に呼び掛けて課題を共有する機関づくりをして、事業推進の効率化を図った。

### 他者を積極的に呼び込む

外部の専門家に公園分析を依頼し改善方針を提案してもらう。またその提案を受け、事業主体者として高校生(ヤングボランティア)を呼び込むなど、地域住民以外の外部資源を積極的に呼び込んだ。

### アートとした理由

公民館区と学校区のギャップから課題の共有化が図り難かった。そこで、20年度のマップのように事業成果物は言語化しなくても分かる、一見で伝わるアートにしたかった。

しかも、地域の庭であり、みんなが関わる公園となるために、子どもから大人まですべての年齢層が種々の形で参加可能な巨大アートを採用した。初年度は福音小学校の創立の指針「たんぽぽ教育」から「たんぽぽ」をモチーフとした絵を子どもの手形でつくることにし、2年目は人と人の繋がり基礎となる「感謝」の気持ちをあらわす「ありがとうの樹」をつくることとなった。

### 成果とポイント、今後の展開

無機質なコンクリート橋脚に、色鮮やかな住民参画によるアートの設置は、公園全体の雰囲気や和らげ、和みの空間を演出する力を持った。一年間3枚の紙パネルを常設したが心配していた落書きがなく、他の橋脚にも落書きが増えなかった。子どもの手形というモチーフが功を奏し、地域住民の視線が公園に向いたことで迷惑行為が減少したのだと思う。初年度の設置事業は、新聞2紙とNHKで、2年目はケーブルテレビと新聞で紹介され、地元でも公園が明るくなったと好評であった。地域課題を少しずつでも改善していく成果が可視化され、活動の継続性が重要であることが認識されていった。今後は、定期的に人が集まる工夫や、公園を明るくするためのアートパネルの増設等に取り組み、より防犯効果が高まるようにしていく予定である。 都市計画297号寄稿より

読売新聞 23・8・18

自治体教育政策シンポジウム (第3種郵便物認可)



# 学ぼう

## 自治体教育政策シンポジウム



佐藤教授

地域の教育を考えた第4回自治体教育政策シンポジウム「市民協働」と地方の時代の教育―地域コミュニティづくりが変える地域の教育(主催・政策研究大学院大学、読売新聞東京本社)が7月29日(東京・港区)の同大で開かれた。佐藤晴雄・日本大学教授が地域と学校の連携の歴史について講演。全国から招かれた4氏の事例報告の後、討論した。討論では、佐藤教授がコーディネーターを、中西茂・読売新聞北海道支社編集委員、討論委員がコメンテーターを務めた。

## 地域と学校つなぐには

佐藤 学校教育は、協働の担い手をきりきりさせる。そうではない社会教育とすり合わせが難しい。小林 学校の計画は年度で変わり、いきなり連携を言い出しては困る面がある。人事異動も影響する。平賀 形行くと協働は機能しない。自己完結せず、



討論する(左から)仙波さん、平賀さん、小林さん、野沢さん

野沢 地域は学校、学校は地域の広がりだ。意識を持ちたい。震災でこれまでの社会が根本から問い直されたこと実感している。

耕作放棄地生かす NPO法人えひめ子どもチャレンジ支援機構事務局長 仙波英徳さん 松山市久米地区で、公民館が中心となって耕作放棄されたみかん園に農業体験やキャンプができる里山を作った。子どもたちの手で地域の安全マップを作り、行政機関に改善も求めた。行政は先例や予算を気にするが、我々は面白そうならやってみる。成果の可視化が大事。種をまく活動によって、新しいニーズが生まれる。多様な世代と多様な団体が関わるのが活動を広げるかきになる。

図書館探検プログラム 長野県伊那市立伊那図書館長 平賀研也さん 4年余り前に公募で館長になった。図書館の事業領域をゼロから見直し、伊那図書館だからできることも考えている。学校向け図書館探検プログラムが好評だ。古本市、土器づくり、お母さんたちのフラメンコライブもやった。図書館が中心になる多機能端末のアプリケーション制作も進めた。地域に人の関係を作る場をデザインするのも図書館の役割だと思う。

平賀 トップと現場をつなぐ、事業単位のマップメントをまず入材を育む仕事がある。仙波 学校支援地域本部を評価するが、一方的な支援するだけな反対。平賀 地域に「私の図書館」が上乗せ入るようなうに、その立場が学校に魅力的な支援をした。小林 地域で活躍する人や団体と学校をつなぐ役割作りを頑張ろうと改めて思った。

町の課題解決で交流 東京都北区教育委員会教育政策課 指導主事 小林祐一さん 市民協働の支援を担当している。北区では、中学校区単位で「学校ファミリー構想」を進め、担当の指導主事やコーディネーター役も置いた。地域の大人がかかわり整形式住居まで作った地区もあれば、年3回の「学校ファミリーの日」に講演会で地域が学ぶ活動もある。取り組みには町の課題を解決する学びも多い。「ファミリー」で地域の交流を深めることが持続可能な街作りにつながる。

30校に「学校支援地域本部」 仙台市立寺岡小学校長 野沢 裕典さん 仙台市は「地域とともに歩む学校」を進めてきた。その柱の一つが学校支援地域本部事業で、今年度は30校に広がっている。3月まで教育委員会の次長をしており、東日本大震災では、支援本部設置校の避難所運営が非常にスムーズだった。この事業が地域のコミュニティ充実の大きな力になっていることは間違いない。学校の果たす役割を考えた上で地域の復興という視点が大事だ。

野沢 役割分担的な協働関係は築けると思う。平賀 役割分担している限りは協働はできない。甘えるのも大事。学校が丸ごと投げやらい言えることができれば、地域が二階に考えようか」となる。野沢 お互いが思いを共有できる場作りが必要だとはわかってはいるつもりだ。仙波 NPOは志趣、協働は「地域の団体。公民館は機能の違いを認識した上で、その目標に向かうことだ。」

各地の取り組み